

令和 3年 7月 27日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 202080185

氏 名 中込 柚珠
(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

- 1 派遣先: 都市名 プラハ (国名 チェコ)
- 2 研究課題名 (和文) : 戦間期プラハにおける芸術と国家政策—マーネス造形芸術家協会を中心に
- 3 派遣期間: 令和 2年 9月 22日 ~ 令和 3年 6月 29日 (281日間)
- 4 受入機関名・部局名: カレル大学哲学部
- 5 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

報告者は、博士課程全体を通じて、プラハを拠点に活動した芸術団体「マーネス造形芸術家協会」のネイション／ナショナリズムに対する言説の調査を行っている。チェコのナショナリズム史研究は、チェコ国内におけるものと英語圏のものとの2つの潮流に大別できる。日本国内においては英語圏の研究成果の方がアクセスしやすいこともあり、これまでは英語圏での研究動向を軸に研究史をまとめてきたが、本在外研究では、チェコ語での研究書や研究論文の収集、またチェコ国内のチェコ史家との意見交換に注力した。とりわけ、冬学期に参加したゼミナール「理論と実践に見る方法論」での学びは有意義であった。チェコの近現代史を専門とし、ともにナショナリズム史に関しても著作のあるマチェイ・スプルニー氏とカレル・シマ氏の2名が教員を務める本ゼミナールには、同じく近現代チェコ史を専門とする幾名かの大学院生が参加した。各自自分の関心のある歴史学の／に応用可能な方法論についての論文を持ち寄り、今後のチェコ史研究にどのように活かしていけるかについて議論した。概して、共産主義体制崩壊後のチェコ国内のチェコ史学では、マイクロヒストリーへの関心が急激に高まる一方で、そうした細やかなケース・スタディーの成果がマスター・ナラティブの周辺に位置づけられたままであるか、あるいは「複数性」の名のもとに十分に統合されないままであると感じた。このことは、報告者が自身の研究を通じて取り組みたい課題でもあるため、チェコ国内の研究者らと同じ課題を共有し合えたことは自身にとって大きな励みとなった。

また、新型コロナウイルス感染症の世界的流行の最中ではあったが、派遣期間終了間際には状況が概ね落ち着き、本派遣の研究課題に必要な第一次大戦以降のマーネス協会の一次史料をおおよそ収集することができた。

6 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本在外研究時に得た研究動向に関する知見は、前世紀転換期のマーネス協会の活動に焦点を当てて執筆した論文に反映させることができた。本論文は既に投稿の準備が整っており、「前世紀転換期プラハにおける芸術界とナショナリズム—マーネス造形芸術家協会を中心に」という題目のもと、査読付き学術雑誌『史林』に投稿する予定である。

また、本年度の8月にオンラインで開催される中東欧研究国際学会にて、同研究内容をもとにした英語の口頭報告を行うことが決まっている。

本派遣で研究課題としていた戦間期の事例については、おおよそ必要な一次史料を揃えることができたが、新型コロナウイルス感染症の影響で、史料調査が帰国の間際となってしまったため、読解はこれから行う形となる。しかし、同テーマに関わる研究動向については、派遣期間中にある程度調査を進めることができた。今年度中に研究を進め、2022年の春に査読付き学術雑誌『東欧史研究』に投稿したいと考えている。それまでに、少なくとも1度、東欧史研究会あるいはハプスブルク史研究会で口頭報告を行うつもりである。

本在外研究の成果は、最終的には博士学位請求論文の一部とし、京都大学大学院文学研究科に提出する予定である。19世紀末から共産主義体制樹立にいたる約半世紀におけるマーネス協会の活動に焦点を当てる予定で、その方針は今後も変わらない。本研究では、協会のネイション／ナショナリズムに対する種々の言説がなぜ／どのように生じていったかについて、ネイションへの愛着心や忠誠心といったものの有無の二項対立に落とし込めることなく分析することを目標としているが、こうした視点はチェコ国内の研究動向においても一定の意義とオリジナリティを確保できると感じた。したがって、今後の研究の方向性に関して大きな変更は予定していない。

7 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

感染症の世界的流行の中で、物理的に大きな制限を伴う滞在となったが、この時勢下でも現地で学べたことには重要な意義があったと感じている。

まず、研究書を含むチェコ語の書籍は、日本からの輸入が不可能である場合が少なくない。この点で、現地に行くことは本研究にとって必須であった。カレル大学には、同大学が設置するFreemover programmeという制度を介して正式に在籍していたため、大学の図書館も活用することができた。国立図書館も利用し、現地でしか読むことのできない書籍にアクセスすることができた。一次史料の収集も、現地に赴いたからこそできたことであった。

対面での人との交流の機会は乏しかったものの、オンラインで現地の授業に参加し、研究について意見交換できたことは、今後の学術活動に繋がる重要な経験になった。語学上の課題を感じることも多々あったが、自身の研究の国際的立ち位置について改めて考える機会となり、今後日本国内に留まらず国際的に学術活動を続けていきたいという思いが一層強まった。また、先生方や他の学生とのコミュニケーションはすべてチェコ語で行った。日本国内においてはチェコ語で話す機会を設けることから容易でないため、大変貴重な経験となった。滞在時に築いた人脈は今後も大事に活かしていきたい。

大学への登録、住居の賃貸契約、銀行口座開設、携帯電話の利用契約といった生活上必要なことは、一部友人の力を借りつつも、基本的にはすべて自力で行った。したがって、今後いつ海外での長期滞在が決まっても制度上対応できるだろうという自信が得られた。

概して、本派遣を通じて得たことは、今後ますます国際的に活動していくための重要な基盤になったと思う。このような情勢下でも派遣の機会を与えていただけたことに感謝申し上げたい。